

2023.06.01



## 三つの工場、二つの偉業(その意義)

6月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年6月1日(木)

### 拓伸会創業70周年記念式典

私は、拓南製鐵の創業者古波津清昇氏の書かれた“鐵の道”をはじめ多くの著書を読ませていただいております。そして、拓南製鐵の三つの工場と二つの偉業(その意義)に強い印象を受け、引きつけられました。

今から62年前、拓南製鐵の創業の地、第一の工場は、“壺川工場”です。この壺川工場で、沖縄の歴史上最初の鐵が生産されました。これは拓南製鐵の第一の偉業(沖縄に鉄筋造り住宅の提供)です。

鐵の生産と同時に“拓鐵興琉”という社は、企業理念が生まれ、拓南製鐵の歴史が始まりました。

それから、17年後(45年前)、第二の工場“浦添工場”に移転、ライバルの共栄製鋼を吸収し、沖縄で唯一の製鐵工場として、拓南製鐵の事業は大きく発展することになりました。

この浦添工場の跡地には、70周年の記念式典を行っている“国立劇場おきなわ”が生まれております。

第三の工場は1995年(28年前)に沖縄市海邦町に建設された“中城工場”です。当時の最先端技術で装備した電炉工場が完成しました。

拓南製鐵の企業理念、“拓鐵興琉”にふさわしく、鉄を生産し、地域を振興して、事業を拡大する使命の下、新製品の開発と多様な鐵製品の生産を行っております。

当時、日本の産業力の中で、沖縄県は人口比1%にも満たない全国比0.7%ぐらいでした。その時、電炉生産で全国比1.1%を達成しました。これは平均身長160cmの環境において180cmとなるにも等しいことです。1%経済の水準を達成した、拓南製鐵の第二の偉業(30年余で鉄の全国並産業化)です。

これから先を考えますと、拓南製鐵の八木社長や松井専務、知念専務、山内常務といつも話をされていて10年後の中城工場のイメージはできます。しかし、20年後、いや100周年を迎える30年後の“第四の工場”は、今、会場にいられている新しい炎、若い世代のご活躍に心から期待いたしたいと思っております。

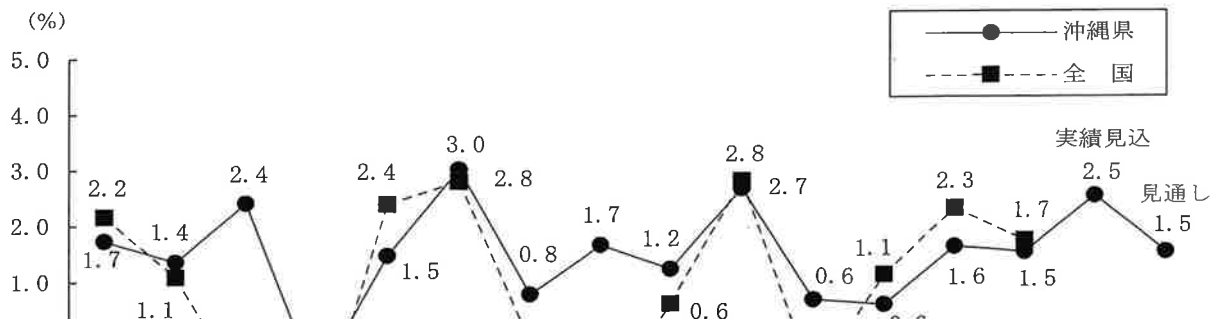
拓伸会創業100周年には、三つの工場、二つの偉業に続く、  
第四の工場の稼働、三つ目の偉業の達成  
に心から期待しております。

#### 4. 沖縄県経済の成長（名目・実質）

区分 年度	沖 縄 県				全 国			
	名 目		実 質		名 目		実 質	
	県内総生産 (億円)	成長率 (%)	県内総生産 (億円)	成長率 (%)	国内総生産 (10億円)	成長率 (%)	国内総生産 (10億円)	成長率 (%)
昭和 47 年度	4,592	-	6,057	-	96,486	16.4	218,215	9.1
(1973) 48	6,629	44.4	8,264	36.4	116,715	21.0	229,326	5.1
49	7,720	16.4	8,473	2.5	138,451	18.6	228,243	△ 0.5
50	9,213	-	12,966	-	152,362	10.0	237,330	4.0
51	9,744	5.8	12,630	△ 2.6	171,293	12.4	246,262	3.8
52	10,873	11.6	13,458	6.6	190,095	11.0	257,412	4.5
53	12,198	12.2	14,210	5.6	208,602	9.7	271,349	5.4
54	13,690	12.2	16,091	13.2	225,237	8.0	285,321	5.1
55	14,905	8.9	16,918	5.1	246,266	-	315,175	-
56	16,160	-	19,841	-	261,914	6.4	324,078	2.8
57	17,340	7.3	20,333	2.5	274,572	4.8	332,655	2.6
58	18,510	6.7	21,204	4.3	286,278	4.3	338,397	1.7
(1984) 59	19,874	7.4	22,138	4.4	306,809	7.2	351,662	3.9
60	21,500	-	24,083	-	327,433	6.7	367,658	4.5
61	22,873	6.4	24,301	0.9	341,921	4.4	378,071	2.8
62	23,975	4.8	25,355	4.3	359,509	5.1	396,958	5.0
63	24,933	4.0	25,956	2.4	386,736	7.6	423,384	6.7
平成 元 年度	26,952	8.1	27,540	6.1	414,743	7.2	441,613	4.3
2	28,638	-	30,803	-	449,997	8.5	467,913	6.0
3	30,148	5.3	31,337	1.7	472,261	4.9	478,035	2.2
4	31,227	3.6	31,762	1.4	483,838	2.5	483,182	1.1
5	32,424	3.8	32,529	2.4	480,662	△ 0.7	478,347	△ 1.0
6	32,295	△ 0.4	32,269	△ 0.8	486,947	1.3	469,621	△ 1.8
(1995) 7	32,711	1.3	32,741	1.5	495,736	1.8	480,963	2.4
8	33,639	2.8	33,726	3.0	506,480	2.2	494,262	2.8
9	34,102	1.4	33,983	0.8	510,466	0.8	493,794	△ 0.1
10	34,953	2.5	34,544	1.7	501,384	△ 1.8	487,603	△ 1.3
11	34,969	0.0	34,962	1.2	496,606	△ 1.0	490,369	0.6
12	35,399	1.2	35,888	2.7	502,783	1.2	504,333	2.8
13	35,391	△ 0.0	36,120	0.6	492,347	△ 2.1	500,388	△ 0.8
14	35,367	△ 0.1	36,322	0.6	488,724	△ 0.7	506,048	1.1
(2000) 15	35,755	1.1	36,897	1.6	493,553	1.0	517,435	2.3
平成16年度（実績見込）	35,670	△ 0.2	-	1.5	496,197	0.5	526,378	1.7
平成17年度（実績見込）	36,270	1.7	-	2.5	-	-	-	-
平成18年度（見通し）	36,790	1.4	-	1.5	-	-	-	-

- (注) 1. 平成16年度（実績見込）、平成17年度（実績見込）及び平成18年度（見通し）は、沖縄県企画部「平成18年度沖縄県経済の見通し」（平成18年3月）による。  
 2. 沖縄県の昭和49年度と昭和50年度、昭和55年度と昭和56年度、昭和59年度と昭和60年度及び平成元年度と平成2年度の数値は不連続である。  
 3. 平成2年度以降（全国は昭和55年度以降）の数値は、「93SNA」方式による推計値である。  
 4. 全国の名目・実質とも、平成11年以前は従来方式を一部改定して再推計した確報値。平成12、13年度は新方式で推計した確報改定値。

#### 経済成長率（実質）



## 自ら踏み出す第一歩 ～わが「道」をつくる～

道程どうてい僕の前に  
道はない  
僕の後ろに  
道は出来るああ  
自然よ  
父よ僕を  
一人立ちにさせた  
広大な父よ僕から目を離さないで  
守る事をせよ常に  
父の気魄きはくを僕に充たせよこの遠い  
道程のためこの遠い  
道程のため高村光太郎たかむらこうたろう

\*用語解説) [気魄] 何ものにも屈せず立ち向かっていく強い精神力。



高村光太郎 (1883～1956年) 明治～昭和期の彫刻家・詩人

高村光雲たかむらこううんの子。東京の生まれ。精神を病んだ妻の智恵子を愛し、妻の病氣静養の地として、千葉県九十九里浜を選び生活させた。詩集に『道程』『智恵子抄ちえこしょう』などがある。

上の「道程」は、有名な詩なので出会った人もあるかと思います。詩の書き出しで光太郎は、「僕の前に道はない」「僕の後ろに道は出来る」と言っています。

初めから自分の生き方や人生は決定しているものではなく、自分から一歩を踏み出すことによって、生き方や進路という道が自然と開けていくというメッセージなのです。

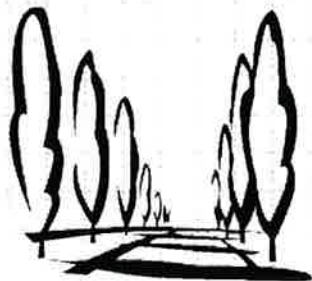
あなたは、「自分らしさ」について、考え悩むこともあるかもしれません。

チャレンジして失敗することがあるかもしれません。

しかし、考え悩むより、何もしないで失敗を恐れるより、行動する勇気を持って一歩を踏み出してください。

そのとき、きっとまわりの人もあなたを後押ししてくれることでしょう。

そして、そこには明日の新しいあなた自身が存在しているのです。





## 沖縄経済

## 「基地経済」からの離陸

米軍基地がなければ、沖縄経済は沈没するのか。

「基地反対」の声が高まる裏側で、企業家の新たなうねりが起きていた。

そして、「軍用の島」は、再び商業の中心地になろうとしている。

それは、危険の代償とでも言おうか。名護市の辺野古から車で約10分。大浦湾沿いの国道を走ると、突然、赤レンガ造りの豪華な建造物が目に飛び込んでくる。地元自治体が3億2000万円を投じた「地域交流拠点」は、地域の産品を販売する店として完成した。だが、いまだにオープンする気配がない。

「光熱費だけで年間に数百万円かかる。あんな交通量の少ない場所で、採

算が合うわけがない」。地元に住む浦島悦子氏は、そう言って口をつぐんだ。

## 平成の琉球処分

自然に恵まれた沖縄本島の北部に、補助金を使った設備が次々と建てられてきた。「住宅地に近く、世界で最も危険」と言われた普天間基地の移設先になったことで、名護市をはじめとした一帯の市町村に、10年間で1000億

円もの振興予算がつけられた。

だが、巨額のカネが投じられても、地元経済は上向かなかった。浦島氏は「基地経済」への依存に危機感を抱き、移設反対の運動に関わってきた。

「負の遺産をさらに増やせば、逆に沖縄を潰してしまう」。自然を破壊するばかりか、施設を維持するコストが、地元にも重くのしかかり始めたからだ。

3億円の交流拠点がオープンできな

米軍普天間基地から離陸する軍用機は、密集する住宅の上空を飛行していく



いのも、営業すれば巨額の赤字を垂れ流すことが見えているからだ。「基地賛成派」だった前市長は、運営費の補填に「米軍再編交付金」のカネを投じると約束していた。ところが、今年1月の名護市長選挙で「基地反対派」の稲嶺進氏が当選すると、「米軍再編交付金は、私の方針と矛盾する」として予算計上を見送ってしまう。

年間2000万円の交付金を当て込んでいただけに、計画を進めてきた地元の10区は青ざめた。他の補助金を回すように懇願している。

「もう、安易な補助金頼みはやめた方がいい」(浦島氏)。事実、地元住民から、稲嶺市長の判断を非難する声はわき上がっていない。「箱モノ行政」が、もはや地元を潤す振興策にならない現実を、県民は思い知らされてきている。

沖縄振興開発計画。1972年に沖縄が本土復帰を果たすと、政府は復興に向けた巨額の補助金制度を創設した。

だが、振興計画に記された10年間で終わっても、経済は低空飛行を続け、10年ごとに延長されてきた。現在は第4次振興計画の終盤に差しかかっている。4月23日、県庁は「新たな振興計画が必要」という認識を示したが、地元経済界は沈黙を続けている。

そこには、国家が示す「アメとムチ」の構図にいつまでとらわれ続けるのか、という沖縄の葛藤がある。

普天間移設問題でも、「アメを与えれば収まる」という国家の思惑が透けて見える。「最低でも県外」のはずが、沖縄本島と鹿児島県徳之島という南の島々に押しつけて問題の決着を図る。

「平成の琉球処分」――。

沖縄では、一連の政府の判断を、そう表現する。たとえ一部を徳之島に移しても、そこはかつて琉球王国に属していた土地だ。北緯29度以南は、琉



辺野古に近い名護市大浦湾沿いに完成した建物は、収支の見通しが立たずオープンできない

球文化を色濃く残す土地。だから、政府は「捨てる」として使いやすいのではないか。かつて廃藩置県で、強引に国家に組み込んだ「琉球処分」と同じ発想が、平成の時代にまかり通っている。沖縄県民は、そう感じ始めている。

### 「基地跡地は巨大都市になる」

5月15日。沖縄は本土復帰38年目を迎えた。この「記念日」は、本土と沖縄の溝の深さを示す結果となった。

「なお続く基地の重圧」(琉球新報)、「38年後の憂い」(沖縄タイムス)。県内の2大新聞は、1面の見出しでそう訴えた。その横には「5・15平和行進」の写真が大きく掲載されている。「アメを与えれば、受け入れる」という安易な懐柔策は通用しなくなっている。

「米軍基地がなくなった方が、経済

効果が高い」(照屋寛徳・衆院議員)。

昨年の衆議院選挙は「革新候補」が圧勝し、沖縄県選出の国会議員は、「基地反対」でまとまっている。それは、大部分の県民の意思を表している。

「米軍跡地の開発が成功したことによって、基地撤退後の不安が薄らいでいる」(久高豊・りゅうぎん総合研究所取締役調査研究部長)

那覇市北部にある那覇新都心は、かつて米軍の牧港住宅地区として使用されていた。87年に全面返還されてから、長らく開発が進まず、住民に不安が広まっていた。だが、21世紀に入り、県内の有力企業や行政機関、日本銀行那覇支店などが相次いで移転して、一大都市へと変貌を遂げた。

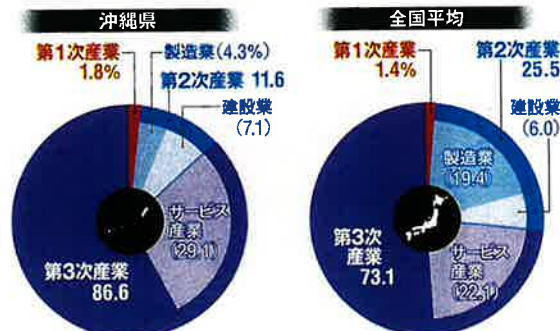
また、北谷町美浜地区にあるアメリカンキャンビレッジは、米軍ハンビー飛行場

跡地に開発され、若者や米軍関係者が集まる商業地区として人気が高い。

「基地跡地は大きなプラスの経済効果をもたらした」。野村総合研究所をはじめとするシンクタンクは、県から受託した調査でそう結論づけた。那覇新都心では、財やサービスの需要が、基地返還前に比べて約16倍に跳ね上がったという。今

### 島から製造業が消える？

日本と沖縄県の産業構成比



注：対総生産(名目)の数字。全国の数字は内閣府経済社会総合研究所「国民経済計算(2008年)」による。沖縄県の数字は沖縄県企画部「県民経済計算(2007年度)」を基に算出



後の跡地も、中長期的に見れば「財政収入が支出を上回る」と指摘する。

だが、同じような開発計画を続けられれば、需要の食い合いになる。「下手をすれば、今の地域社会を抜け殻にして荒廃させてしまう。全く新しい需要を生み出す必要がある」(当銘栄一・おきぎん経済研究所調査研究員)。

新しい企業と産業がわき上がり、人材が流入して経済が活性化していく好循環を起さなければならぬ。

だが、「基地経済」後の未来を描く時、沖縄の弱点が浮かび上がってくる。

「いつまでも観光だけで成長できる保証はない。バランスの良い産業構造にしなければ経済成長はない」。沖縄唯一の製鉄会社、拓南製鉄の古波津清昇会長は、そんな危機感を抱く。本土復帰を果たした際、沖縄の製造業は産業構成比で10%を超えていた。だが、現在は4%台に落ち込んでいる。一方、観光業を中心にした第3次産業が膨張を続け、9割近くに達した。

沖縄経済の病理とも言える。補助金や減税策で流れてくるマネーを観光関連の施設へと注ぎ込み、地道な経営努力を怠ってきた。産業構造の変化は、そのことを如実に物語る。

本土と違う、強くてしなやかな沖縄企業を育てたい——。そう言う古波津会長の経営史は、敗戦の焦土から始まる。米軍は沖縄に300万発とも言われる銃撃と、6万発の砲撃を加えた。

「鉄の暴風」。その焼け野原から鉄屑を拾い集めて、米軍政府に引き渡してカネを得た。県民の命を奪ったモノを換金して生き延びる不条理。しかも、鉄屑はいつか尽きてしまう。思い悩んだ末に、「産業の米」を自らの手で作り上げる鉄鋼業への進出を目指した。

「沖縄の会社に、製鉄などできるはずがない」。そうした嘲笑を横目に、

敗戦から10年後には伸鉄業に参入して、その後、沖縄初の電炉を建設する。

「拓鉄興琉」。鉄鋼業の道を拓いて琉球を興す。会長室には、彼の原点となる言葉が今も飾られている。会社設立後も苦難が続く。規模が小さい沖縄電力は、本土より2割も高い料金でしか電力を供給できない。電炉は大量の電力を使うだけに、コスト競争力に直結する。そこで、廃材から石油を搾り出す技術を開発して自家発電につなげるなど、コスト削減策を打ち続ける。

「うちが使う電力コスト全体からしたら、小さな効果かもしれない。でも、細かい努力でも続けていく」

厳しい環境でも、屈せず前進する。琉球王国から沖縄戦、米軍支配へと続く苦難の歴史が、この地に本土と異なる特質を育んだ。不屈の精神、そして階級による格差が少ない社会、多様

性を受け入れる風土……。それが今、経営の現場で新しい流れを生み出す。

## 不屈の新・経営者列伝

「奇跡の復活劇」。沖縄のIT(情報技術)業界で、そうささやかれている企業がある。山川朝賢社長が率いるアイディーズ(那覇市)は、東急ストアや西鉄ストアなど、全国の地方スーパー30社と契約し、約1000万世帯の顧客会員の販売データを入手している。これを沖縄のデータセンターで分析して、販売促進活動に結びつける。

実は、この事業アイデアで倒産した過去がある。山川社長がシステム開発会社を創業したのは88年のこと。だが、創業後しばらくして顧客データを分析する現在の事業を思いつくが、社員の抵抗に遭う。そこで、自ら会社を去り、家族を沖縄に残して単身で東京

